

実体経済の動向

◇製品在庫率は久方ぶりに低下

(生産—横ばい)

2月の鉱工業生産(速報、季節調整済み、前月比)は、4ヵ月連続減少のあと横ばいとなった(前年同月比-18.3%)。これは、鉄鋼、非鉄、金属製品等で減産が強化されたものの、その他の多くの業種で年末・年始休暇長期化による前2ヵ月の大幅減産の反動増がみられたためである。

2月の動きを特殊分類別にみると、一般資本財(圧延機械、射出成形機、クレーン等)、建設資材(棒鋼、橋りょう、セメント、アルミサッシ等)が前月著減の反動もあって大幅増加となったほか、非耐久消費財(メリヤス下着、生活用陶磁器等)も小幅ながら増加に転じたのに対し、資本財輸送機械がトラックの落込みを主因にかなりの減少、耐久消費財も乗用車の反動減もあって減少を続けた。また生産財は、化学(塩ビ樹脂、ポリエチレン等)がエチレン・センターの定期修理の一服からかなりの増加となったほか、紙・パルプ(製紙パルプ、白板紙)、繊維(毛織物、合成繊維織物)等

も小幅の増加となったが、鉄鋼、非鉄等の減産強化が響いて引き続き減少した。

(出荷—若干ながら増加)

2月の鉱工業出荷(速報、季節調整済み、前月比)は、+0.8%と4ヵ月ぶりに増加(前年同月比-14.1%)、フレの大きい船舶を除いても+0.7%と5ヵ月ぶりの増加となった。これは、生産財の減勢はなお続いているものの、最終需要関連業種では流通在庫調整がほぼ一巡し、末端需要も個人消費、公共投資等に持直しの兆しがみられたためである。

2月の出荷の動きを特殊分類別にやや詳しくみると、生産財が必要業界の減産継続を映じた原材料需要の減退(粗鋼、電気銅等)や輸出の鈍化(化学肥料等)から減少したほか、耐久消費財も、家電(カラーテレビ、電気冷蔵庫等)は流通在庫調整一巡や末端需要の持直し気配から増加に転じたものの、前月著増をみた乗用車の反動減を主因に減少した。これに対し非耐久消費財(メリヤス下着、服類、紙等)が流通在庫調整の一巡もあって小幅ながらも2ヵ月連続の増加となったほか、建設資材も公共投資(橋りょう、セメント等)・住宅投資(アルミサッシ、アルミニウムドア等)関連品目を

鉱工業生産の動向

(季節調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減(-)率・%)

	49年				49年			50年		
	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	12月	1月	2月	12月	1月	2月
鉱工業	132.3	129.5	124.9	118.4	113.8	108.8	108.8			
前期(月)比	-2.1	-2.1	-3.6	-5.2	-4.7	-4.4	0			
前年同期(月)比	7.4	1.3	-4.7	-12.4	-14.9	-18.2	-18.3			
投資財	-2.8	-0.6	-2.6	-5.6	-6.1	-4.5	2.3			
資本財	-3.5	1.7	-1.2	-3.8	-7.2	-4.4	2.1			
同(輸送機械を除く)	-5.5	5.9	-3.7	-6.0	-9.0	-8.2	5.2			
輸送機械	-0.5	-5.7	3.1	2.8	-4.4	4.0	-			
建設資材	-1.5	-6.0	-5.7	-10.7	-2.8	-5.7	4.6			
消費財	-2.1	-1.4	-1.6	-1.6	-3.9	-2.0	5.0			
耐久消費財	-1.3	-5.1	-0.8	-1.7	-4.5	-2.4	7.6			
非耐久消費財	-2.5	-1.6	-2.6	-1.1	-3.6	-2.0	0.6			
生産財	-1.1	-4.0	-5.5	-7.2	-4.2	-4.3	-0.6			

(注) 1. 通産省調べ、50年2月は速報。
2. 前年同期(月)比は原指数による。

鉱工業出荷の動向

(季節調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減(-)率・%)

	49年				49年			50年		
	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	12月	1月	2月	12月	1月	2月
鉱工業	130.9	127.0	124.0	119.8	114.4	111.2	112.1			
前期(月)比	-3.9	-3.0	-2.4	-3.4	-4.9	-2.8	0.8			
前年同期(月)比	4.2	-2.1	-6.2	-12.1	-14.3	-19.7	-14.1			
投資財	-6.0	2.5	-4.4	-1.6	-4.6	-4.5	4.5			
資本財	-6.9	6.3	-4.4	2.2	-4.7	-6.3	4.1			
同(輸送機械を除く)	-6.6	4.4	-2.8	-5.1	-5.4	-9.1	9.6			
輸送機械	-8.0	9.6	-6.9	16.3	-0.9	3.5	-			
建設資材	-5.6	-4.6	-3.3	-10.0	-4.7	-1.5	4.1			
消費財	-3.4	-5.7	-2.1	-1.3	-5.8	-2.0	0.7			
耐久消費財	-4.8	-9.7	-5.7	-1.8	-7.4	-4.6	1.7			
非耐久消費財	-2.0	-2.9	-0.5	-1.0	-4.3	-0.4	2.9			
生産財	-3.1	-5.2	-3.3	-5.9	-4.5	-4.3	-1.4			

(注) 1. 通産省調べ、50年2月は速報。
2. 前年同期(月)比は原指数による。

中心に増加、一般資本財も前月著減の反動もあって大幅に増加した。

(在庫——2ヵ月連続の減少)

2月の鉱工業生産者製品在庫(速報、季節調整済み、前月比)は、前月減少(-0.9%)のあと-2.0%と31年3月(-3.8%)以来の大幅減少となった(前年同月比+37.1%)。生産者製品在庫率(同、45年=100)も146.9と4ヵ月ぶりに低下し(前月151.2)、とくに、フレの大きい船舶を除く在庫率は1年1ヵ月ぶりの低下となり、製品在庫調整が大きく進捗したことを裏付けている。

製品在庫の動きを特殊分類別にみると、生産財(鋼帯、電気銅、硫酸等)が増加を続けているのに対し、一般資本財(トラクター、標準三相モーター等)、資本財輸送機械(トラック等)、建設資材(形鋼、棒鋼、アルミサッシ等)、耐久消費財(カラーテレビ、軽乗用車等)が引き続きかなりの減少となったうえ、累増を続けていた非耐久消費財(服類、紙等)も4ヵ月ぶりに減少に転じた。

鉱工業製品在庫の動向

(季節調整済み、特殊分類別は前期(月)末比増減(-)率・%)

	49年(期別)				49年(月別)	50年(月別)	
	3月	6月	9月	12月	12月	1月	2月
鉱工業指数	127.8	148.2	159.7	169.7	169.7	168.1	164.7
前期(月)末比	9.2	16.0	7.8	6.3	3.3	-0.9	-2.0
前年同期(月)末比	12.3	29.4	36.0	45.1	45.1	46.4	37.1
製品在庫率指数	103.4	118.8	130.3	148.3	148.3	151.2	146.9
投資財	16.4	19.4	12.1	2.4	-0.4	-3.4	-5.7
資本財	19.2	23.3	13.8	1.3	-2.2	-3.3	-5.5
同(輸送機械を除く)	16.6	19.8	15.7	1.0	-3.4	-2.4	-5.3
輸送機械	38.7	37.2	6.7	0.2	-1.3	-7.3	-
建設資材	13.1	14.6	9.0	3.6	2.2	-3.8	-4.9
消費財	4.6	14.7	5.8	6.3	5.6	-1.5	-4.6
耐久消費財	8.9	21.5	7.5	6.2	5.8	-3.6	-5.3
非耐久消費財	1.8	9.7	4.2	5.5	5.6	0.9	-3.9
生産財	9.2	15.5	7.1	7.0	3.0	0.5	1.7

(注) 1. 通産省調べ、50年2月は速報。
2. 前年同期(月)末比は原指数による。

(原材料在庫——1月は小幅増加)

1月の製造工業原材料在庫(速報、季節調整済み、前月比)は、前月微減のあとも+0.5%と小幅

の増加にとどまった。これは、減産強化を映じて原材料消費が減勢を続けているにもかかわらず、ユーザー筋が原材料手当て量を大きく削減していることが主因である。国産分は、素原材料が引き続き増加したものの、ウェイトの大きい製品原材料(機械用鋼材、ナフサ、ポリエステルチップ等)が、ユーザーの手当て量削減方針持続により減勢を続けたため減少となった。一方、輸入分は、製品原材料が増加に転じたほか、素原材料(鉄鉱石、銅鉱、原油等)も比較的長契ものが多いことから依然かなりの増勢を余儀なくされているため引き続き増加した。この間、原材料在庫率は140.3と引き続き上昇をみた。

製造工業原材料在庫および在庫率の推移

(季節調整済み、前期(月)末比増減率(-)・%)

	49年(期別)			49年(月別)		50年(月別)
	6月	9月	12月	11月	12月	1月
在庫指数	144.9	144.9	146.6	147.1	146.6	147.3
前期(月)末比	2.8	0	1.2	1.1	-0.3	0.5
国産分	1.3	0.1	-0.1	0.4	0.1	-0.3
素原材料	-6.3	4.4	7.9	3.6	4.6	1.5
製品原材料	2.9	0.4	-1.9	-0.9	-1.4	-0.7
輸入分	7.1	2.5	7.1	4.3	0.7	2.6
素原材料	4.3	3.0	8.5	4.8	1.3	2.5
在庫率指数	119.0	123.5	136.6	133.4	136.6	140.3
国産分	117.7	122.7	133.8	130.3	133.8	136.7
素原材料	86.2	93.3	110.6	102.6	110.6	114.3
製品原材料	124.4	130.4	139.5	138.0	139.5	141.9
輸入分	118.2	121.1	141.0	136.2	141.0	146.9
素原材料	114.3	116.5	136.1	130.6	136.1	142.3

(注) 通産省調べ、50年1月は速報。

(販売業者在庫——12月は引き続き増加)

12月の販売業者在庫(速報、季節調整済み、前月比)は、+2.7%と前月に続きかなりの増加となった。これは、鋼材、非鉄(電気銅、くず銅等)、石油製品(重油、軽油等)、繊維(綿糸・綿織物、合繊糸等)等がユーザー業界の減産強化を映じた需要急減を主因に、また、家電製品(カラーテレビ、冷蔵庫等)でも年末ボーナス商戦の不発を映じ、それぞれかなりの在庫累増をみたためとみられる。この間、需要持直し傾向の自動車(とくに大

販売業者在庫の推移

(季節調整済み、前期(月)末比増減(-)率・%)

	49年(期別)			49年(月別)		
	6月	9月	12月	10月	11月	12月
総合指数	135.9	139.3	149.2	142.2	145.3	149.2
前期(月)末比	-1.5	2.5	7.1	2.1	2.2	2.7

(注) 通産省調べ、49年12月は速報。

乗車)は一部ディーラーの拡販努力も加わって減少した。

(設備投資——一般資本財出荷は著増)

2月の一般資本財出荷(速報、季節調整済み、前月比)は、前月著減(-9.1%)のあと+9.6%と著増した。これは、大型機械類等の反動増(圧延機械、射出成形機等)が主因であるが、土木工事関連資材(パワーシャベル、トラクター等)の増加も響いている。

2月の機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み、前月比)は、前月減少(-4.5%)のあと、電力からの受注集中(前月比4.3倍)を主因に+22.0%と大幅に増加した。もっとも製造業向けは、自動車引き続き増加したほか、繊維、石油精製等も反動増となったが、鉄鋼が3か月連続増加のあと反動減となったほか化学、機械等も減少したため、2か月連続増加のあとほぼ横ばいとなった。なお官公庁向けは、2か月連続減少のあと+24.1%と大幅に増加した。

需要先別機械受注の推移

(季節調整済み、月平均、単位・億円)

	49年			49年	50年	
	4~6月	7~9月	10~12月	12月	1月	2月
民需	3,479	3,585	2,559	2,561	2,652	3,344
	(35.0)	(3.0)	(-28.6)	(-0.3)	(3.5)	(26.1)
同(船舶を除く)	3,138	3,453	2,488	2,608	2,491	3,040
	(38.0)	(10.0)	(-27.9)	(-9.2)	(-4.5)	(22.0)
製造業	1,823	2,000	1,362	1,472	1,573	1,569
	(38.6)	(9.7)	(-31.9)	(17.7)	(6.8)	(-0.3)
非製造業	1,621	1,614	1,200	1,046	1,081	1,777
	(29.3)	(-0.5)	(-25.6)	(-22.2)	(3.3)	(64.4)
同(船舶を除く)	1,302	1,486	1,118	1,061	946	1,490
	(33.7)	(14.1)	(-24.8)	(-8.1)	(-10.8)	(57.5)

(注) 経済企画庁調べ、カッコ内は前期(月)比増減(-)率(%)。

2月の建設工事受注額(民需、速報、季節調整済み、前月比)は、+4.0%(前月+15.6%)とかなりの増勢を持続した。これは製造業からの商談は低調が続いているものの、民間ビル工事や倉庫、トラック・ターミナル等非製造業からの受注が増加しているためとみられる。なお官公庁向けは、前月(同+5.3%)の反動もあって-3.2%と減少した。

◇2月の小売商況は伸び悩み

2月の全国百貨店売上高(速報、通産省調べ、季節調整済み、前月比)は、-3.8%と減少した。これには、前月著増(+5.5%)の反動のほか、法人需要の減少も影響しているとみられ、法人需要のウエイトが高い大都市百貨店の伸び悩みが目だっている。個人消費については、雇用調整等の動きをながめ消費者の仕ぶりは慎重ながらも、消費者物価の落ち着きもあって購買態度には徐々に緩みが見られはじめたと指摘する向きもある。

なお3月の乗用車新車登録台数(速報、軽自動車を除く、自販連調べ、季節調整済み前月比)は、前月大幅増加(+9.5%)の反動から-4.0%と減少したが(前年同月比+61.4%)、1~3月通計では前期比+9.6%と増加した。

◇商品市況は引き続き強含み

3月の商品市況をみると、概して騰勢は前月ほどではなかったものの、鉄鋼、銅がじり高を続け、亜鉛、砂糖、白板紙等が反発、また天然糸が月末にかけて再び上昇するなど総じて強含みで推移した。この間、木材、セメントは軟化し合繊糸も弱保合いで推移した。

このように市況が引き続き強含みで推移したのは、輸出環境は依然厳しいものの、①大幅減産により供給が引き続き絞られていること、②流通在庫の調整がほぼ一巡しているうえメーカーの値上げの動きをながめ先高見込みによる在庫補充買いの動き(鉄鋼、銅、紙、砂糖等)もみられること、③さらには、末端実需にも一部持直し気配がうかがわれること(鉄鋼、繊維、石油等)、などの事情によるものである。

条鋼類…… 棒鋼、形鋼とも上旬保合いのあと月央からじり高商状となり、月間では3～4千円方の上伸となった。

これは、前月活発化した特約店筋の在庫補充買いが一段落し、実需も総じて追従難ながらメーカーが大幅減産続行を背景に採算点回復をねらって引き続き売り腰を強めているためである。

鋼板類…… 厚板、薄板とも月中じり高商状となり、厚板が2.5千円、薄板が1千円上伸した。

これは、造船向けや輸出の落込みが引き続いているものの、高炉メーカーが引き続き減産を強化していることや、自動車、電機等の需要業界の原材料在庫調整が峠を越しつつあることから申込み量の減勢が止まったことに加え、高炉メーカーの製品価格引上げの意向表明もあって市場には先高観が台頭しつつあり、一部には仮需の動きもみられたことなどが主因。

くず鉄…… 月初に高炉メーカーから系列平電炉メーカーへのくず鉄放出により小幅下落となったあと、機械等関連業界の減産による発生減から月央以降再び反発、結局前月末比1千円方の上昇となった。

合 織…… 合織糸は、主力商品のナイロンが小幅低落するなど、総じて弱保合いとなった。

このように弱保合いとなったのは、内需面では末端流通段階でファッション性の高い婦人ものを中心に持直し傾向がみられるほか、機屋筋の糸手当てにも動意がみられるなど多少明るさが出てきた反面、①輸出環境は引き続き不ざえで、現地バイヤーの買いたたきが強まり安値受注を余儀なくされていること、また、②国内供給面でも全体としては大幅な減産体制が継続されているものの、一部にコスト圧迫軽減のため操短率を多少緩和する動きが出てきたこと、などのためである。このため、年初来のメーカーの値上げ(1～2割程度)交渉は、引き続き難航している。

綿 糸…… 月央一時訂正安商状となったあと、月末にかけて再び上伸、月中を通して小幅上昇となった。

これは、供給面では、輸入が増加したものの、不況カルテルの延長継続に伴い、国内供給量が引き続き絞られたほか、末端需要面でも婦人、子供ものを中心としたプリントものなどに部分的ながら動意がみられはじめているためである。もっとも、前月にみられた人气的な動きはやや後退したうえ、製品安、糸高に悩む機屋筋が急テンポな市況高騰をながめ採算上一時糸手当てをストップしたこともあって、市況の騰勢は前月に比べれば小幅にとどまった。

生 糸…… 生糸は前月来の訂正安商状のあと月央から再び上伸し、月末には11,230円と昨年1月以来の高値を示現した。

このような上伸の背景としては、①製糸メーカーの生産抑制、蚕糸事業団への窓口一元化による輸入抑制から供給量が引き続き抑えられていること、②末端小売店では、卒業、入学、結婚式等シーズン入りもあって値ごろの中級和服中心に予想以上の売れ行きとなったこと、③このため白生地市況も漸次回復しており、問屋筋の機屋に対する先物約定にも前向きの姿勢がみられはじめたこと、④50生糸年度(50年6月～51年5月)の基準糸価が本年度比12%アップの11,200円に決定したこと、などの要因が指摘されている。

そ毛糸…… 前月の上伸地合いをうけて小幅ながら続騰した。

これは、前月の市況回復をリードした人气的要因が後退したほか、相場急騰をながめ機屋筋には糸手当てを手控える向きもみられたが、流通段階の在庫補充買いが続いており、また不況カルテル実施下、供給量が引き続きかなり抑えられていること、メーカー在庫の減少が続いている(ちなみに、尾州地区の営業倉庫在庫は2月末9,126トン→3月末8,026トン)こと、などのためである。

銅…… 銅は前月反発に転じたあと、続伸した。この背景をみると、①LME相場が通月550ポンド前後の水準で比較的堅調に推移し、これを映じて国内建値も再度にわたり引き上げられた(前月末390→400→410千円)こと、②このため、底値観

が広まり、一部流通段階を中心に在庫積み増しの動きがみられた一方、③山元筋でも、大幅減産による在庫の増勢鈍化を背景に売り腰をかなり強めているため。

亜鉛……亜鉛は小幅ながら持ち直した。これは、主力亜鉛鉄板向けを中心に実需は依然低迷しているものの、ダイカスト・メーカーの一部で在庫調整がほぼ一巡、小口ながら補充買いの動きがみられる一方、山元筋が大幅減産を背景に建値維持の構えを崩していないことが主因。

鉛……鉛はLME相場の軟調、ポンド安を映じ月初に建値が小幅の引下げ(180→175千円)をみたうえ、主力需要先であるバッテリー・メーカーが冬需の不振に加え決算月ということもあって、依然地金手当てを絞っているものの、山元筋が大幅減産継続、輸出努力などを背景に売り腰を崩していないため、通月保合いで推移した。

アルミ……アルミは保合いとなった。これは、サッシ、電線等の主要ユーザー筋の需要はなお低調で、精錬各社の大幅減産にもかかわらずメーカー在庫は累増を続けているものの、末端ユーザー段階における在庫水準はすでに低く、またメーカー筋の建値維持意欲も強いため。

石油製品……3月の石油製品市況をみると、大口需要家との値上げ交渉(昨年10月通告分)はほぼ決着をみつつあるうえ、需給バランスの回復傾向もあって相場はハイサルファC重油、ガソリンを中心に強合みに推移した。

大口需要家に対する昨年10月通告分の値上げ交渉は、3月に入って業況悪化の著しい一部業種(セメント、石油化学等)を除きほぼ妥結をみたが、内容的には当初通告に比してかなりの後退となった(当初通告では10月中旬以降出荷分につき3,400~3,800円/klの値上げとなっていたが、結局11~12月以降出荷分につき2,400~2,700円/kl程度の引上げ<いずれも全油種平均>)。この間、需給バランスは、原油入着の落着き、製油所の事故続発に伴う供給量の減少に加え、輸出の好調(ハイサルファC重油)、末端実需の持ち直し傾向(ガソ

リン、家庭用灯油)などもあって一部油種(ナフサ、ローサルファC重油)を除きこのところかなりの改善をみている。

セメント……3月のセメント市況は内需が停滞の域を脱せず、一部メーカー筋で安値受注を余儀なくされたことからバラ物、袋物とも小幅続落となった。

内需は大幅落込みをみた1月を底に一応回復傾向となっているが、3月入り後20日まで前年比9%減と依然低水準で回復テンポは鈍い。これは官公需が不況対策の実施から地方公共団体を中心に立直りをみているものの、大型プロジェクトが凍結されたままであるため、需要の大幅増加にはつながっていないこと、民需が設備投資を中心に停滞を続けていることに加え、コンクリートパイル等セメント2次製品の在庫調整が遅れていることなどを映じたものである。

この間、供給面では前年比15%程度の減産体制を続けているが、上記のような需要の不振から在庫は2月末で3.8百万トンと高水準を続け、荷余り感を拍車している。

木材……前月末にかけ訂正安商状となっていた外材がかなりの値下がりが続けたほか、弱保合いで推移していた内地材も原木を中心に小幅ながら軟化した。このようにここにきて反落したのは、需要面で、①合板業界の減産強化を映じた買いつけ減退(南洋材)などから総じて荷動きが鈍く、②大工、工務店等末端需要筋や問屋等中間段階の仮需がはく落したこと、また供給面でも、③先高見越しでスポット的に手当てした外材(とくに米材)の入着増に加え、昨年来の市況好転をながめ国内製材業者の出荷が漸増傾向を続けたこと、などが背景となっている。この間、大工、工務店等においては、最近の住宅関連金融の緩和などを背景に工事単価の見積り依頼などがこのところ増えはじめている模様であるが、これら製材品の末端実需筋ではここ2~3ヵ月かなり在庫を補充したとみられるだけに、このところ当用買いに終始している。

化学品……合成樹脂の市中相場は、前月総じて反発商状を示したあと保合いとなった。これは原料樹脂メーカーが大幅減産をてこに値上げ交渉を続けているものの、プラスチック加工業者等ユーザー筋では、原料樹脂価格の上昇分を製品価格に転嫁する自信がもてないため、一部製品(フィルム向け高圧ポリエチレン)を除いて値上げ交渉が難航し、つれて市中でも模様ながめ気分が強まったことが主因である。

一方、基礎薬品類については、硫酸、カセインソーダとも保合いとなった。需要は総じて引き続き停滞しているものの、供給がかなり減少しているため需給はほぼバランスがとれているとみる向きが多い。

紙……クラフト紙、段ボール原紙は産業用需要の不ぎえから弱地合いを続けたものの、前月下げ

止まりとなったアート・コート紙、白板紙が小反発したほか、これまで続落商状をたどっていた上質紙も安値品が影を潜め一部で小反発するなど、総じて反発商状となった。

このようにアート・コート紙、白板紙、上質紙が反発したのは、末端実需の回復ははかばかしくないものの、①印刷、紙器、段ボール等のユーザー筋および流通段階の在庫調整がほぼ一巡した結果、荷動きがある程度回復してきていること、②このためメーカー在庫も、板紙、アート・コート紙等は減少傾向がはっきりしてきていることに加え、③メーカー筋の値上げ発表をながめ、ユーザー、卸商筋の一部に仮需が台頭していること、などによる。

砂糖……国内相場(現物)は月央まで保合いで推移したあと、月末には小幅上伸をみた。

卸売物価指数の推移

(単位:%)

	ウ エ イ	49年		49年 12月	50年		50年2月			3月	
		7~9 月平均	10~12 月平均		1月	2月	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬
総平均	100.0	2.9	1.2	0.2	0.4	0.5	0.1	0.1	0.3	0.1	0
食料品	13.4	4.7	7.7	1.3	0.1	1.3	0.1	0.2	0.1	0.5	0.2
非食料農林産物	2.4	0.8	4.1	0.5	0.1	1.9	0.5	0.5	2.6	0.7	0.4
繊維製品	7.8	7.3	3.1	0.6	1.0	0.2	0.5	0.2	0.4	0.5	0.1
製材・木製品	3.8	3.5	4.4	0.9	1.8	0.3	0.3	1.6	0.4	0.8	0.3
パルプ・紙・同製品	2.8	1.8	1.9	2.0	1.3	1.4	0.1	0.1	1.5	0.2	0.2
金属素材	1.9	0.8	10.4	0.1	7.7	2.6	4.3	1.3	1.5	0.9	2.5
鉄鋼	9.4	13.3	3.5	1.2	3.5	3.0	0.3	0.2	0.6	0.1	0.1
非鉄金属	4.2	14.7	9.5	2.8	1.8	0.9	0.5	0.3	0.2	0.1	0.1
金属製品	3.8	1.2	1.2	0.4	0.7	1.8	0.6	0.1	1.1	0.2	0
電気機器	9.0	1.9	1.9	0.5	0	0.3	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1
輸送用機器	6.8	1.8	0.8	1.6	0.5	0.3	0	0.2	0.3	0.5	0.1
一般・精密機器	10.8	2.2	1.2	0.3	0.4	0.3	0.1	0.1	0.3	0.3	0.1
化学製品	8.8	3.9	3.7	0.1	0.1	0.3	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2
石油・石炭・同製品	4.6	10.2	6.8	1.3	0.2	0.3	0.1	0.4	0.4	0.1	0.1
窯業製品	3.1	3.2	2.6	0.1	0.1	1.2	0.6	0.2	0.3	0.2	0.1
雑品目	7.6	8.3	3.0	0.2	0.4	0.4	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1
工業製品	85.5	1.8	0.7	0.1	0.3	0.6	0.1	0.1	0.3	0	0.1
大企業性製品	63.3	2.6	1.4	0	0.5	0.7	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
中小企業性製品	20.1	1.4	0.8	0.3	0.1	0.9	0.3	0.4	0.4	0	0.1
非工業製品	14.5	8.9	2.9	0.7	1.1	0.3	0.3	0.1	0.2	0	0

(注) 日本銀行調べ。

これは、飲料、菓子等の末端実需が不振なうえ、海外原糖相場も最近ではかなりの下落をみているものの、①原糖の高値買付け分の入着本格化を理由に、一部メーカーが農林省に対し、30~50%の値上げ(4月1日実施の意向)を申請したため、ユーザー、小売店等に仮需が台頭していること、②メーカー各社も値上げの早期浸透をねらって生産、出荷をかなり絞っていること、が主因である。

(卸売物価——統落)

卸売物価は2月に-0.5%と下落したあと、3月上旬も輸出入品が海外安や円高の影響から下落したため前月比-0.1%と統落、中旬は保合いと、落ち着いた動きを続けた(中旬の前年同月比+4.9%)。

品目別にみると、上旬には食料品、繊維製品が上昇したものの、製材・木製品が統落したほか一般・精密機器、輸送用機器も統落した。また中旬には、金属素材がくず鉄の上昇を主因に反発したほか化学製品が統騰したものの、食料品、製材・木製品が統落した。

(工業製品生産者物価——統落)

2月の工業製品生産者物価は-0.3%と統落した。

品目別にみると、天然繊維・化繊、普通鋼鋼材が反発したほか、合繊が上昇したものの、パルプ・紙・同製品、金属製品が統落、製材・木製品が反落した。

(消費者物価——3月<東京都区部、速報>はかなりの上昇)

3月の消費者物価(東京都区部、速報)は、灯油が統落したものの、果物、鶏卵が大幅に値上がりしたほか、衣

料、設備修繕費、教養娯楽費等も上昇し、前月比+1.0%(前月同+0.4%)と、かなりの上昇となった(前年同月比+14.0%)。また季節商品を除く総合でも、前月比+0.7%と上昇した。

2月の全国消費者物価は、果物、野菜の値上がりを中心に食料品がかなりの上昇をみたものの、衣料の大幅下落や灯油の値下がりなどから、総合では前月比+0.3%(前年同月比+13.9%)の小幅の上昇にとどまった(季節商品を除く総合では前月比+0.2%の微騰)。

(輸出入物価——下落)

2月の輸出入物価は、鉄鋼の統落を主因に金属・同製品が大幅統落したのをはじめ、繊維品、雑品目もかなりの下落をみるなど、全類別が下落したため、前月比-2.8%(前月同-2.0%)の大幅統落となった。また輸入物価も木材・同製品、機械器具が上昇したものの、鉄くずの海外安を映じて金属が大幅統落したほか、食料品、雑品目も下落したた

消費者・輸出入物価指数の推移

(単位・%)

	ウェイト	49年		50年			最近月の前年同月比		
		7~9月平均	10~12月平均	1月	2月	3月			
消 費 者 物 価	総合 (季節商品を除く)	100.0 (91.3)	3.5 (3.1)	4.2 (5.6)	0.4 (-0.1)	0.4 (0.3)	* 1.0 (0.7)	* 14.0 (14.6)	
	東 京 都 区 部	食料	40.3	4.1	4.2	1.1	0.5	* 1.7	* 15.1
		居住	11.8	1.4	2.3	0	0.3	0.7	7.6
		光熱	3.7	16.4	10.9	- 2.0	- 0.1	- 0.1	32.0
		被服	12.4	0.2	1.0	- 1.1	0.3	1.0	7.7
		雑費	31.8	3.6	5.8	0.4	0.2	0.3	16.2
	特 殊 分 類	農水畜産物	16.6	5.2	2.7	2.0	0.6	...	9.3
		工業製品	43.6	2.0	2.3	- 0.1	0.2	...	10.8
		うち大企業製品	19.8	3.5	3.7	0.3	0.2	...	13.6
		中小企業製品	23.8	1.0	1.3	- 0.2	0.3	...	9.1
サービス	37.0	3.0	7.3	0.2	0.4	...	17.8		
全 国	総合 (季節商品を除く)	100.0 (91.0)	3.8 (3.4)	4.4 (5.6)	0.5 (0.1)	0.3 (0.2)	...	13.9 (15.1)	
輸 入 物 価	輸 出		7.2	- 0.4	- 2.0	- 2.8	...	4.5	
	輸 入		7.5	2.4	0	- 1.6	...	15.7	
	交 易 条 件		- 0.3	- 2.7	- 2.1	- 1.2	...	- 9.7	

(注) 1. 消費者物価は総理府統計局調べ、輸出入物価は日本銀行調べ。
2. *印は速報。

め、前月比 -1.6% (前月保合い) の反落となった。

この結果、2月の交易条件指数(68.1、45年=100)は前月比 -1.2%と引き続き悪化した。

◇国際収支は再び黒字

2月の国際収支は総合収支で254百万ドルの黒字と、1月に貿易収支の季節的要因から大幅赤字(1,242百万ドル)となったあと、再びかなりの黒字を計上した。

これは、短期資本収支がBCユーザンスの決済集中から流入超幅を縮小したものの、貿易収支が輸入の落込みから大幅な黒字となったほか、長期資本収支も対日証券投資の増大、外債発行の集中などから大幅の流入超を記録したため。

2月の貿易収支(国際収支ベース)を季節調整後で見ると、輸出は船舶引渡しの落込みに加え弱電製品、化学製品等も不振で前月比 -7.5%とかなりの減少を示したものの、輸入が国内生産活動の停滞を映じた鉱物性燃料、金属原料等の落込みから同 -11.9%とこれを上回る大幅な減少をみたため、収支じりでは前月(黒字667百万ドル)を上回る822百万ドルの大幅黒字となった。

長期資本収支は、242百万ドルの流入超(前月198百万ドルの流出超)と既往最高の流入超を記録した。これは、本邦資本が直接投資、借款供与の低水準に加え、証券投資も前月に引き続き回収超をみたことから、131百万ドルの小幅流出超(前月同260百万ドル)にとどまった一方、外国資本は対日証券投資が既往最高の買い越しとなったうえ外債の発行集中もあって、373百万ドルの大幅流入超(前月は62百万ドルの流入超)となったため。一方、短期資本収支は、船舶前受金の流入増や石油のシッパーズ・ユーザンス享受超はあったものの、BCユーザンスが大幅決済超となったため、9百万ドルの小幅流入超(前月流入超83百万ドル)にとどまった。

金融勘定をみると、為銀の対外ポジションは、在日外銀のインパクト・ローン供与増、円転進捗を主因に月中204百万ドルの悪化となった。この結果、月末負債超過額は13,006百万ドルとなった

(前年同月末負債超6,265百万ドル)。

この間、外貨準備高は月中459百万ドル増加し、月末残高は13,968百万ドルとなった。

(輸出—数量、価格とも落込み)

2月の輸出(国際収支ベース)は、季節調整後で前月比 -7.5% (通関ベース同 -9.3%) と前月(同 +7.3%、通関ベース同 +6.4%) 比かなりの減少となった。原計数の前年同月比でも +30.6% と前月(同 +41.5%) に比べ伸び率はかなり低下した。

品目別にみると、繊維・同製品が増加したものの、鉄鋼が停滞色を強めたほか、これまで好調が続けてきた化学肥料も当月は伸び悩み、また自動車、弱電製品、食料品も依然不振が続いている。

通関輸出の前月比伸び率を数量と価格に分けてみると、輸出数量(季節調整後)は、繊維、鉄鋼等が増加をみたものの、船舶の引渡しがかかなり減少したほか、化学肥料、弱電製品等が前月増加の反動もあって大幅な落込みをみたため、-3.3%の減少となった。一方、輸出価格も、繊維品、弱電製品が上昇したものの、これまで上伸が続けてきた鉄鋼が下落したのが響いて、5ヵ月ぶりに-1.4%の低下となった。

地域別にみると、中近東向け(季節調整後、前月比 +12.0%) が引き続き好伸したほか、中南米向け(同 +2.5%) もやや持ち直したものの、共産圏向け(同 -22.8%) は前月増加の反動もあって減少を示し、また、米国向け(同 -11.2%) や西欧向け(同 -3.6%) 等先進地域向け(同 -6.4%)、東南アジア向け(同 -4.9%) は引き続き伸び悩んでいる。

先行指標である輸出信用状接受高(季節調整後、前月比)は、2月に +3.2% とやや持ち直したあと、3月は -0.7% の小幅減少となった。品目別には、前月落ち込んだ化学肥料が持ち直したものの、鉄鋼がかんがりの不振となり、また繊維、自動車等も依然伸び悩みを続けている。地域別にみても、中近東向けや欧州向けがまずまずの伸びを示したが、東南アジア向け、米国向けは引き続き不振。

(輸入—停滞色強める)

2月の輸入(国際収支ベース)は、季節調整後で

国 際 収 支

(単位・百万ドル)

	49 年			49 年	50 年		49年2月
	4～6月	7～9月	10～12月	12月	1月	2月	
経常収支	△ 2,377	△ 90	1,192	702	△ 1,143	107	△ 1,208
貿易収支	△ 821	1,561	2,723	1,228	△ 582	605	△ 685
輸出	13,484	14,696	16,222	5,862	3,616	4,358	3,338
輸入	14,305	13,135	13,499	4,634	4,198	3,753	4,023
貿易外収支	△ 1,418	△ 1,595	△ 1,481	△ 511	△ 530	△ 484	△ 513
移転収支	△ 138	△ 56	△ 50	△ 15	△ 31	△ 14	△ 10
長期資本収支	△ 1,045	△ 551	△ 766	△ 341	△ 198	242	△ 478
本邦資本	△ 890	△ 750	△ 1,271	△ 385	△ 260	△ 131	△ 345
外国資本	△ 155	199	505	44	62	373	△ 133
基礎的収支	(△ 3,422)	(△ 641)	(△ 426)	(△ 361)	(△ 1,341)	(349)	(△ 1,686)
	(△ 2,468)	(△ 1,422)	(△ 737)	(△ 413)	(△ 92)	(566)	(△ 1,610)
短期資本収支	137	467	△ 57	△ 97	83	9	477
誤差脱漏	220	△ 427	595	116	16	△ 104	10
総合収支	△ 3,065	△ 601	964	380	△ 1,242	254	△ 1,199
金融勘定	△ 3,065	△ 601	964	380	△ 1,242	254	△ 1,199
外貨準備増減	1,003	△ 260	349	△ 220	△ 9	459	334
その他	△ 4,068	△ 341	615	600	△ 1,233	△ 205	△ 1,533
外貨準備高	13,429	13,169	13,518	13,518	13,509	13,968	11,900
為銀対外 ポジショ	△ 11,889	△ 12,262	△ 11,591	△ 11,591	△ 12,802	△ 13,006	△ 6,265

- (注) 1. カッコ内は貿易収支のみを季節調整した基礎的収支。
 2. 短期資本収支は金融勘定に属するものを含まない。
 3. 金融勘定の△印は純資産の減少。

輸 出 入 指 標 の 推 移

(季節調整済み、単位・百万ドル)

	国際収支ベース			通 関		輸 出	輸 出	輸入承認・
	輸 出	輸 入	貿易じり	輸 出	輸 入	信用状	認 証	届 出
49年 4～6月	(+ 4,563 22.5)	(+ 4,519 10.4)	44	(+ 4,594 21.4)	(+ 5,296 12.7)	(+ 3,386 14.0)	(+ 5,002 25.1)	(+ 5,974 6.0)
7～9 "	(+ 4,750 4.1)	(- 4,490 0.6)	260	(+ 4,873 6.1)	(+ 5,321 0.5)	(+ 3,596 6.2)	(+ 5,244 4.8)	(- 5,665 5.2)
10～12 "	(+ 5,007 5.4)	(- 4,487 0.1)	520	(+ 5,133 5.3)	(+ 5,358 0.7)	(+ 3,712 3.2)	(+ 5,437 3.7)	(- 5,488 3.1)
49年 11月	(- 4,902 6.0)	(+ 4,540 1.5)	362	(- 5,120 3.6)	(+ 5,381 0.7)	(- 3,654 0.6)	(- 5,470 2.3)	(+ 5,713 5.9)
12 "	(4,903 0.0)	(- 4,449 2.0)	454	(- 4,960 2.9)	(- 5,348 0.6)	(+ 3,805 4.1)	(- 5,241 4.2)	(- 5,353 6.3)
50年 1月	(+ 5,262 7.3)	(+ 4,595 3.3)	667	(+ 5,285 6.4)	(+ 5,510 3.0)	(- 3,172 16.6)	(+ 5,550 5.9)	(- 4,837 9.6)
2 "	(- 4,869 7.5)	(- 4,047 11.9)	822	(- 4,793 9.3)	(- 4,607 16.4)	(+ 3,272 3.2)	(- 5,009 9.7)	(- 4,565 5.6)

- (注) 1. 四半期計数は月平均。
 2. カッコ内は前期(月)比増減(-)率(%)。

通 関 輸 出 の 内 訳

(対前年同期(月)比増減(-)率・%)

	49 年				50 年		
	4～6月	7～9月	10～12月	輸出額 百万ドル	1 月	2 月	輸出額 百万ドル
食 料 品	12.8(- 8.8)	- 2.0(- 7.8)	- 19.9(- 0.4)	225	- 16.9(-12.3)	32.6(-20.4)	48
魚 介 類	16.4(-19.9)	- 7.8(-10.4)	- 27.5(0.9)	140	- 25.1(- 4.5)	- 34.3(-10.2)	35
織 維・同 製 品	36.8(8.5)	30.6(1.0)	6.1(-10.6)	1,047	- 11.6(- 0.2)	5.9(16.3)	300
合 織 糸	49.9(18.9)	61.4(9.8)	2.9(-25.0)	141	- 22.4(- 9.2)	1.9(12.5)	40
綿 織 物	43.3(12.2)	26.0(- 9.3)	14.0(2.3)	69	2.7(4.7)	31.8(- 2.2)	19
合 織 織 物	39.6(8.6)	28.4(0.1)	11.1(- 7.0)	341	- 7.3(7.9)	1.4(6.6)	91
化 学 製 品	77.3(32.5)	124.3(28.9)	99.6(- 1.5)	1,242	117.0(20.7)	56.8(-20.6)	350
非 金 属 鉱 物 製 品	28.5(10.6)	17.4(- 2.8)	11.9(- 1.6)	178	1.1(1.8)	22.2(9.9)	54
金 属・同 製 品	99.3(33.5)	120.6(18.0)	113.4(13.8)	4,601	86.4(- 2.1)	77.6(- 0.3)	1,200
鉄 鋼	94.9(30.3)	118.9(21.0)	121.4(19.7)	3,783	96.1(- 2.1)	89.7(0.5)	1,005
機 械 機 器	50.9(20.4)	35.0(- 3.4)	31.4(6.1)	7,971	27.5(6.5)	16.4(- 5.8)	2,154
(船舶を除く)	41.5(13.3)	37.8(3.2)	26.7(- 0.6)	6,171	25.2(8.0)	15.7(- 4.4)	1,781
事 務 用 機 器	- 5.5(6.2)	- 9.9(0.9)	- 19.6(- 6.5)	202	- 11.5(-11.7)	- 4.9(18.8)	53
テ レ ビ	28.3(7.3)	17.8(- 3.9)	16.4(- 1.5)	170	0.1(- 6.2)	- 10.0(- 7.4)	42
ラ ジ オ	16.5(7.0)	9.7(- 4.5)	- 1.4(- 6.9)	341	- 3.0(8.0)	- 7.5(- 1.3)	87
自 動 車	54.4(21.5)	55.6(8.2)	35.0(- 9.2)	1,409	35.3(8.0)	16.7(- 1.2)	433
二 輪 自 動 車	59.4(10.6)	72.6(23.8)	54.0(- 4.6)	392	24.5(9.8)	19.9(- 9.6)	132
船 舶	100.5(53.1)	23.8(-17.1)	50.5(25.8)	1,800	34.2(12.3)	19.9(-41.8)	373
光 学 機 器	40.4(5.3)	37.8(4.4)	22.2(- 2.4)	348	13.7(7.8)	3.2(- 8.8)	99
テ ー プ	- 2.1(0.0)	- 7.3(- 5.7)	- 15.7(-10.9)	180	- 3.6(22.2)	- 25.0(-18.8)	44
レ コ ー ダ ー							
そ の 他	51.9(13.4)	51.3(9.5)	52.1(7.9)	1,274	37.0(1.1)	21.3(- 8.1)	334
合 計 (船舶を除く)	55.0(17.8)	59.2(9.4)	48.7(2.6)	14,740	42.4(5.2)	30.7(- 5.5)	4,069

(注) カッコ内は季節調整済み前期(月)比(%) (センサス局法による)。

前月比 -11.9% (通関ベース同 -16.4%) と前月 (同 +3.3%、通関ベース同 +3.0%) 小幅増加のあと大幅な減少となり、停滞色を強めた。原計数の前年同月比では、前年における原油入着価格の急騰が響き -6.7% と 46年 5月 以来はじめて前年水準を下回った (前月同 +24.6%)。

品目別 (通関ベース) にみると、鉄鉱石、肉類が前月減少の反動もあってやや増加したほかは、鉱物性燃料 (原油、石炭)、非鉄金属鉱、繊維原料 (綿花、羊毛) 等主要品目は軒並み減少した。

通関輸入額の前月比を数量と価格に分けてみると、輸入数量 (季節調整後) は、前月大幅減少の石炭、鉄鉱石が増加したものの、原油、食料品 (小麦、とうもろこし、砂糖等)、繊維原料 (羊毛、綿花)、非鉄金属鉱等主要品目が軒並み落込みを示

したため、-10.4% と大幅な減少となった。一方輸入価格は、石炭が高値スポット手当て分のはく落からかなり下落したほか、綿花、鉄鉱石等も低下をみたものの、砂糖、羊毛等が引き続き上昇したため、+2.2% と続伸した。

地域別にみると、中南米 (季節調整後、前月比 +10.0%)、ソ連 (同 +16.3%) などが増加したほかは、米国 (同 -13.8%) を中心とした先進地域 (同 -9.5%)、東南アジア (同 -12.3%) を中心とした発展途上地域 (同 -14.7%) とともに不振で、いずれも前年水準を下回っている。

3月の輸入承認・届出額 (季節調整後、前月比) は、2月 -5.6% とかなりの減少をみたあと、3月は +1.8% と小幅の増加となった。品目別には、繊維原料 (羊毛、綿花) がやや増加した反面、木

材、非鉄金属鉱、砂糖等が伸び悩まないし減少を示した。

2月の輸入素原材料在庫率指数(45年=100)は、

同消費(季節調整後、前月比)が-2.0%と減少したものの、同在庫も-2.2%と減少したため、142.0と

5ヵ月ぶりに前月比0.3ポイントの低下となった。

通 関 輸 入 の 内 訳

(対前年同期(月)比増減(-)率・%)

	49 年				50 年		
	4~6月	7~9月	10~12月	輸入額	1 月	2 月	輸入額
				百万ドル			百万ドル
食 料 品	45.6(8.2)	20.2(- 2.2)	20.5(6.1)	2,287	28.6(17.0)	24.5(- 5.4)	727
肉 類	- 46.0(-34.3)	- 63.2(-27.8)	- 51.3(5.7)	113	- 65.4(-17.2)	- 64.6(0.9)	17
魚 介 類	5.8(- 2.7)	- 9.7(- 3.6)	- 10.2(2.6)	302	- 9.0(- 1.9)	- 16.4(- 3.2)	64
小 麦	119.1(25.7)	62.6(- 5.6)	59.6(7.0)	320	58.3(17.3)	16.2(-25.4)	107
とうもろこし	104.9(13.5)	36.9(-10.5)	27.2(16.6)	254	17.2(14.4)	1.1(-21.9)	69
砂 糖	120.4(50.6)	156.8(45.2)	264.2(47.0)	496	254.4(- 1.5)	264.4(-27.7)	148
原 燃 料	102.7(14.9)	93.0(6.4)	67.2(2.6)	10,199	43.7(- 1.4)	- 1.8(-15.3)	2,848
羊 毛	- 59.4(-45.6)	- 61.0(- 8.4)	- 71.8(-29.4)	70	- 57.3(46.1)	- 55.8(- 5.0)	35
綿 花	44.7(9.1)	86.9(29.9)	33.3(-14.6)	229	28.5(-11.3)	- 4.3(-19.2)	84
鉄 鉱 石	24.5(- 7.2)	24.0(8.7)	19.9(3.0)	547	- 2.6(-11.8)	2.5(12.7)	176
鉄 鋼 く ず	- 1.8(27.3)	43.8(62.4)	81.1(16.3)	152	274.7(32.8)	91.8(-37.4)	41
非 鉄 金 属 鉱	83.1(4.8)	12.9(-17.0)	4.6(3.2)	565	- 15.9(- 3.3)	- 24.3(-15.7)	130
大 豆	5.5(-10.4)	- 21.4(-18.8)	27.5(38.6)	248	54.4(63.1)	23.2(-16.6)	88
木 材	12.9(- 1.1)	13.6(0.8)	- 26.1(-23.8)	726	- 32.8(7.3)	61.9(- 3.5)	185
石 炭	54.6(19.9)	146.6(62.1)	180.6(26.5)	1,085	88.1(-29.7)	69.0(- 6.3)	246
原 油	273.7(29.7)	226.6(7.0)	156.3(5.0)	5,135	100.7(- 4.7)	7.5(-11.2)	1,494
化 学 製 品	86.2(10.0)	36.9(-11.5)	- 6.1(-13.6)	606	- 13.2(- 0.4)	- 33.4(-19.7)	146
機 械 機 器	59.8(11.1)	20.7(- 5.7)	20.4(7.9)	1,242	16.3(- 7.2)	- 7.9(-12.9)	378
航 空 機	652.4(—)	- 18.7(—)	217.9(—)	131	419.1(—)	- 58.1(—)	40
そ の 他	37.7(- 0.5)	- 0.6(-15.3)	- 21.7(-12.7)	1,543	- 28.3(4.2)	- 36.1(-12.8)	396
工 業 用 原 料	93.6(15.3)	76.2(0.8)	47.8(- 4.9)	11,451	28.5(- 1.2)	- 7.2(-15.7)	3,197
消 費 財	43.6(3.0)	13.0(- 7.1)	11.9(6.0)	2,895	18.4(17.4)	4.5(- 9.8)	929
一 般 消 費 財	55.7(1.0)	8.8(-13.0)	- 17.9(-14.7)	713	- 28.8(- 2.1)	- 29.1(3.5)	157
資 本 財	62.4(15.4)	21.1(- 5.6)	19.8(2.0)	1,117	17.2(- 9.2)	- 10.2(- 8.3)	340

(注) カッコ内は季節調整済み前期(月)比(%) (センサス局法による)。